

# 海外農業投資の

眼

'99.12. No.13



社団法人 海外農業開発協会



105° N

30° N

## 四川省の「人面竹」

学名：*Phyllostachys sp.*  
[タケ科：BAMBUSACEAE]  
中国名：人面竹

「蜀南竹海」、「蜀」は四川省の別名。同省はタケの博物館といわれ、南部には4,700haの楠竹（*Phyllostachys heterocycla*、モウソウチク）のほか23種からなる6,700haの竹林資源が広がっている。*Phyllostachys*（マダケ）属の中には、節が斜めにつき、節間が膨らむため亀甲状になる突然変異種があり、人面にも似るのでこの名がある。

農林水産用資材、細工物、工芸品としての竹幹、タケノコは農民にとって貴重な収入源になっている。

（第一事業部 井佐彰洋）



◆ 焦点

- パプア・ニューギニアにおける農林業投資の展望 ..... 1  
パプア・ニューギニア森林研究プロジェクト 森林経営担当 石橋 暢生

◆ 日本企業へのメッセージ

- チリ第VII州(マウレ地域)への招待 ..... 3  
第VII州農業局長 ジョージ・ケリガン (George Kerrigan Richard)

◆ 昆明“花博覧会” 3題

- 夏雲 雲南省北京経済連絡事務処長インタビュー ..... 8  
(社)海外農業開発協会 第一事業部
- 中国昆明世界園芸博覧会見聞記 ..... 10  
関東造園建設協同組合 理事長 佐藤 友義
- “春城”無處不飛花 ..... 14  
中国農業大学 社会科学部 講師 王 之盈

◆ 投資案件 DATA FILE

- コスタリカ ②加工食品 ..... 20  
(社)海外農業開発協会 第一事業部

◇海外農業開発協会 (OADA) の民間支援活動 ..... 24

# 焦点

## パプア・ニューギニアにおける農林業投資の展望

私は国際協力事業団（JICA）が実施しているパプア・ニューギニア森林研究プロジェクトで森林経営を担当している。活動は国立森林研究所（FRI）への森林に関する研究協力なので農林業投資とは直接関係ないが、活動を行いながら得ることができたパプア・ニューギニア（PNG）における農林業投資の現状及び可能性等について林業を中心に展望した。

### 1. PNGの概要

面積は日本の約1.3倍、人口は400万余なので、主な都市を一歩出れば森林、草原の中に村々が散在しているという感じである。土地の97%は慣習的共同所有地のため各部族がランドオーナーとなって所有している。経済圏としては、オーストラリアのすぐ北に位置していることと、1975年の独立以前はオーストラリアが統治していたこともあり、同国とのつながりが強い。また、東南アジア出身の人々も経済活動に関わっており、都市部では外国人が思いのほか多い。一方、国民の約8割が自給・半自給農耕に生計を依存しているといわれている。

農林産物は鉱物（金、銅、石油等）に次ぐ輸出品となっており、主な輸出産物は、木材、コーヒー、紅茶、ココア、コプラ、オイルパーム、バニラ等となっている。国内向けの農林産物は自給的生活が大部分を占めているためマーケットは大きくない。

### 2. 日系企業等の事例

PNGでは1970年代頃に日本から林業開発目的で数社が進出し、現在3社（JANT、SBLC、

OBT）が事業を30年近く継続している。進出初期の頃は造林及び基盤整備のためにJICAの投融资事業を利用した例がある。PNGは熱帯材を丸太で輸出できる数少ない国であり、マレイシアの企業を中心に天然林の伐採をしているが、日系企業3社は人工造林も進めており、この3社でPNGの植林面積約6万haのうち半数を占めているため、PNG政府において、しばしば好例として取り上げられている。この3社のうち2社を訪れる機会を得たので投資の事例として紹介する。また、日系企業と関係ないが、国際熱帯木材機関（ITTO）が実施しているバルサプロジェクトも併せて紹介する。

#### ①JANT社の事例

王子製紙が出資しているJANT社は1971年からマダンでパルプ材生産を目的とした事業を実施している。現在の植林面積は約9,000haである。当初はカメリレ（*Eucalyptus deglupta*）等数種を植林していたが、1992年からアカシア・マンギュームに絞って植林している。伐期は8年で、年間10万m<sup>3</sup>程度のチップを生産して日本に輸出している。ここのユニークな点は、JANT社による植林のほかに、ランドオーナーが自ら植林している地主造林が現在までに約1,300haある。苗木はJANT社が無償で配布しており、年間300haの新植が予定されている。

JICAプロジェクトではJANT社の植林地を利用してアカシア・マンギュームの林分収穫表を作成したところ、マレイシアより生長が良い結果となった。また、1991年から共同で精英樹選抜事業を実施しており、その選抜効果がかなり大きいことが最近実証された。

#### ②Stettin Bay Lumber Company (SBL)社の事例



パプア・ニューギニア森林研究プロジェクト

森林経営担当 石橋暢生

日商岩井が出資しているSBLC社は1970年からニューブリテン島のホスキンスに近いブルマで原木の生産、製材、植林等を実施している。現在の植林面積は約1万1,000haで、主な樹種はカメレレ、エリマ(*Octomeles sumatrana*)等の8樹種である。今年、植林後初めてカメレレが合板用材として日本に輸出された。この特筆すべきことは、天然林が減少している状況において1メートル近い人工林の大径材が間伐を実施することにより16年くらいまでに伐期を短くすることが実証されつつあることである。

#### ⑤ITTO-ENB Balsa Industry Strengthening Projectの事例

ITTOが1996年からニューブリテン島のラバウルに近いケラバットでバルサ産業振興のために育種、植林、普及活動等を実施している。植林面積はITTOプロジェクト及び地域のランドオーナーによる小規模植林を併せて約100haと少ない。しかし、加工会社が3社あり4~6年生で伐採した丸太を製材し模型等の特殊材料としてドイツ、中国、台湾等に輸出している。バルサは用途が限られているためマーケットは狭いが、生長が早く、世界で一番軽い材としての特性を生かして、もっと商品開発をすれば可能性のある材と思われる。

### 3. 投資ポテンシャルとしての農林産物

PNGに分布する植物は、東南アジアとオーストラリア両植物系がオーバーラップしているので、世界的に見ても多様性に富んだ地域である。自生樹木約2,000種のうち有用樹種として134種が登録されているが、主要造林樹種としてとしては外来樹種を含めて十数種が産業造林されて

いるに過ぎない。このためJICAプロジェクトでは在来樹種の造林研究に取り組んでおり、新たな産業造林樹種の開発が期待される。

JICAでは過去にいくつかの開発協力調査を行っており、林業開発以外では油料作物、カカオ、サゴヤシがある。この中で油料作物、カカオはすでに主要な輸出作物となっている。澱粉が採れるサゴヤシについてはまだ各農家が小規模に生産しているにすぎないが、世界の3分の1のサゴヤシがPNGに存在するということで、これから期待される作物と思われる。また、当地にはビンロウジュの実が嗜好品として広く愛用されているが、これも各農家が小規模に生産しているにすぎない。興奮作用などの効果があり、その特性を生かした商品開発が期待される。その他、植物の多様性に富んだ特徴を生かした商品開発が期待される。

### 4. 投資環境

投資をめぐる環境としては、近隣の東南アジア諸国と比較すると、治安が悪いこと、土地問題がネックであること、インフラが整備されていないこと等、決して良いとはいえない。特に最近では、累進の木材輸出税とキナ(現地通貨)安の影響によりドル建ての木材輸出が高課税となっている。在PNG日本大使館はPNG政府に對して課税の見直しの申し入れを行っている。

PNGは貨幣経済が浸透してから日が浅く、人々は現金収入を得る機会が限られているため、換金作物の栽培には関心が高い。また、さば缶詰、米の例のように、収入があれば新しい物を取り入れる気風がある。PNGはしばしば最後の秘境と呼ばれるが、可能性を秘めた国である。

## チリ第VII州(マウレ地域)への招待

第VII州農業局長

ジョージ・ケリガン (George Kerrigan Richard)



海外農業開発協会で意見交換する訪日代表団

本誌No.6（98年1月）では、「チリの農林部門～投資と事業機会の豊かな分野～」と題してチリ大使館農務参事官のパブロ・アルバレス氏に登場いただいた。この度、同国内でも農業生産、農産品輸出で上位を占める第VII州（マウレ地域）の代表団が来日、当協会を訪れ、今後の協力関係等について意見交換する機会を得た。

帰国後、第VII州農業局長ジョージ・ケリガン氏から企業の方々へのメッセージが寄せられたのでその一部を以下に紹介する。

去る11月、私たちチリの第VII州（マウレ地域、州都はタルカ市）の企業および地方自治体関係機関代表で構成する代表団は、1週間と短い滞在期間でしたが、都内の農産物卸売市場と農畜産物関係の企業を訪問しました。訪日の目的は、わが第VII州で生産される農畜産品の日本市場への宣伝と今後の輸出拡大へ向けた市場調査の実施にありました。

代表団のメンバーは、マウレカトリック大学農学部長のロムロ・サンテリエス、州議会議員ホセ・パルマ、マウレ地域国際見本市財團 (FIMAULE : Feria Internacional de MAULE) 総裁のロドルフォ・モラガ、並びに州内の農林牧畜関係企業の代表者たち（文末リスト参照）です。

訪日による主な成果のうち特筆すべき点は、2000年3月に幕張メッセ（千葉県）で開催される「第25回国際食品・飲料展 (FOODEX JAPAN 2000)」における第VII州の中小農業関係企業への経営支援情報システムの導入と国際協力事業団 (JICA) に対する有機農産品の認証に関する技術協力プロジェクトの紹介です。もうひとつは、FOODEX JAPAN 2000に参加する第VII州が提供できる機会に関する広報活動・情報提供やチリ側が希望する投資プロジェクトを日本の潜在的投資家(企業)に紹介するセミナーの開催可能性などについて海外農業開発協会(OADA)と意見交換したことです。

また、代表団は日本の輸入業者やスーパーマーケットの代表者の方々に、チリの農産物は化学物質の使用水準が低く有機農産品として品質が高いことをご理解いただき、輸入に結び付けていたため、来年3月、第VII州タルカ市で開催する「国際見本市 (FITAL 2000)」への参加を強く呼びかけました。

さらに滞在中、我が州の保存肉、サクランボ、タマネギ、チーズ、アスパラガス、マッシュルーム、有機野菜、ベリー類、豚肉などの日本市場における潜在力を確認することもできました。というのは、第VII州の農産加工企業は高い技術水準と効率性を備え、日本の消費者に高品質な農産品を安定的に提供できる競争力を有していると考えるからです。

この度の訪日を通じて代表団は、日本の買い手、投資家との長期にわたる関係性の確立・維持を確信しており、第VII州公的機関はすでに「FOODEX JAPAN 2000」への地元関係企業の積極的参加奨励を通じて、今回の訪日のフォローアップを行うことを決定しています。今後は、日本の投資家と第VII州の生産者の相互利益に寄与する関係の促進を目指さなければならないとの認識を持っています。

これらの成果が、日本と第VII州という異なるふたつの地域を結び付け、グローバル化する世界の中で相互補完的目的のもと、確固たる貿易関係の基盤を築く第一歩となることを期待しています。

以下に第VII州「マウレ地域」の農業・農産加工業の概要を紹介させていただきます。我が国、とりわけ我が州により関心を持っていただきたための参考となれば幸いです。是非、多くの日本企業の方々が「タルカ国際見本市」に参加いただけますことをお待ちしています。

#### 「タルカ国際見本市 (FITAL 2000)」

場所：第VII州タルカ市

期間：2000.3.27～29

内容：チリ、メルコスール、中南米の企業との商談、  
チリ企業の訪問

連絡・問い合わせ先：チリ大使館商務部

TEL 03-3769-0551 大谷

## 第VII州（マウレ地域）の農業・農産加工業の概況

マウレ地域では、農林畜産品が輸出產品のほとんどを占めており、日本向けの主要農牧畜輸出品とも一致している。1998年、世界向けの主な輸出高は、針葉樹のセルロース(6,360万USドル)、トマ

トジュース(同3,360万USドル)、原産地呼称付きワイン(1,460万USドル)、砂糖大根の搾り粕(610万USドル)等。

日本はチリ農產品の重要な消費市場で、1998年は輸出先国として第2位の地位を占めた。同年のマウレの輸出総額は3億8,400万USドルで、第1位のアメリカが7,300万USドル(19%)、第2位の日本が3,200万USドル(8.3%)。マウレの輸出総額に対する日本市場のシェアは、チリ全体と同様アメリカに次いで2位を占めている。

ここ数年間、輸出は活発な伸びを記録しており、マウレは野菜・果実輸出の国内第4番目の產地である。昨年度の輸出実績は2,200万ケースで、同時期の全国果実・野菜輸出の13%に相当する。この内キウフルーツと赤リンゴはそれぞれ40%、30%を占める。青リンゴとナシの輸出は200万ケース。

## 野菜

1996／1997年における野菜の栽培面積は1万9,893.6ヘクタール(全国の17.8%)で、過去10年間で60%増加した。栽培地は一般に主要消費地の周辺に位置し、生鮮野菜として生産されている。主な作目は生鮮・加工用トマト、加工用トウモロコシ。最も顕著な伸びを示したのは加工用トマトの6,245ヘクタールで、同地域の野菜栽培面積全体の33%を占めた。IANSA社とAGROZZI社の大規模トマトペースト工場、AGROCEPIA社の乾燥加工工場がある。

## 果物

過去10年間、赤リンゴやアメリカンチェリー、ラズベリーの新植を積極的に進めた結果、これらの栽培面積では国内最大となった。一方、かつて果実類の中で栽培・輸出をリードしてきたキウフルーツの栽培面積は26%減少した。果実類の作付け概況は以下のとおり。

主要果実の作付け面積

種類	作付け面積 (96／97、ha)	比較増減 (90—96、%)	国内の面積割合 (96／97、%)
赤リンゴ	15,868	100.8	53.8
キウフルーツ	3,590	-26.2	46.7
青リンゴ	3,279	10	32.2
ラズベリー	3,171		43.9
西洋ナシ	3,149	33.4	29.5
アメリカンチェリー	2,544	77.7	52.7

出所：INE第6回チリ農牧畜調査 チリ基金 農業経済レビュー43号

## ブドウとワイン

ワイン用ブドウの栽培が集中している地域は北部のクリコバレー(Curico)と中部のマウレバレー(Maule)。マウレの農業・自然条件はブドウ栽培に適しており、その栽培面積は2万9,554ヘクタールで全国の36.4%を占める。その内、9,759ヘクタールは白ワイン用、1万9,705ヘクタールは赤ワイン用。この内で、9,813ヘクタールの国産種は一般クラスブドウ。高級種は地域内では栽培面積の60%近くを占める。

マウレは国内きってのワイン用ブドウ生産地であり、1996年の収穫量は国内全体の56%に匹敵す

る1億5,500万リットルに及んだ。

この地域のワインに適した自然環境に加えて、近年、ワインは国内外ともに単価が上昇する(平均1リットル当たりUS2ドル)という恵まれた市場環境にあるため、ワインの輸出額は1997年には4,770万USドル(全国の12%近く)で、主な輸出先はアメリカ、カナダとヨーロッパ。

## 豚肉生産

州内には21の養豚場があり、総飼育頭数は12万3,938頭で国内全体の7.2%に当たる。近年は、中小の養豚場から工業化された大規模養豚場にとって代わられており、後者による生産が次第に増大している。全国的にも同じ傾向がみられている。

## 訪日企業概要

<u>ENRIQUE ZAROR Y CIA</u> アグロインダストリー企業。主要産物は、①精米・加工(タルカに工場、「サロール」は国内有数のブランドのひとつ)、ブドウ栽培(カベルネソーヴィニヨンブラン、ソーヴィニヨンブラン、シャルドネー、メルロー等200ha)、最新鋭のワイン製造、瓶詰工場)、養豚(生産能力2万頭/年間、遺伝的に優秀な豚を導入)。	<u>SOCIEDAD VITIVINICOLA SAGRADA FAMILIA</u> 16の小規模ワイン製造者による組織。全体で116haのブドウ畑を所有、その内35%はソーヴィニヨンブラン、65%はカベルネソーヴィニヨン。生産量の90%は原地で瓶詰され、主としてベルギー、オランダ、オーストリアに輸出、残りの10%は国内消費へ。生産量はソーヴィニヨンブラン40万リットル、カベルネソーヴィニヨン70万リットル。
<u>AGROINDUSTRIAL JAIME SOLER S.A.</u> サクランボ、キウイフルーツ、リンゴ、ナシ等の生鮮果実、サクランボのマラスキーノ(リカーやシロップ漬け、砂糖漬けを生産。自社の栽培地で生産され、自社施設で梱包。関連会社が養豚経営(28,000頭)。	<u>JAIME BOSCH E HIJOS CIA LTDA</u> 輸出用果実生産会社。生鮮果実はブドウ(トンプソン種)、キウイフルーツ、リンゴ(レッドチーフ、ロイヤルガラ、フジ、グラニースミス、プラエブン)、コンフェレンス梨(ダンジュー、ベリーポスク、バートレット)、日本すもも。乾燥果実はダージャンプラム、干しブドウ(黒サルタン)。
<u>VINICOLA GARCIA HUIDOBRO S.A.</u> ワイン醸造会社。カベルネソーヴィニヨン、メルロー、シャルドネー、ソーヴィニヨンブラン等、130haを栽培。生産能力300万リットル、全量輸出向け、主要輸出先国はカナダ、スウェーデン、フランス、フィンランド、アメリカ。	<u>AGRICOLAY COMERCIAL VALLE SUAVE LTDA</u> 生鮮アスパラガスの生産・輸出会社。単独のアスパラガス生産会社としては国内最大規模(栽培面積180ha、生産量は800ton)、主要輸出先国はアメリカ、カナダ、欧州の数ヶ国、
<u>EXPORTADORA FRUCOL LTDA</u> 果実輸出会社。主な輸出品はラズベリー、イチゴ、桑の実等ベリー類の冷凍品、主要輸出先国はヨーロッパ、アメリカ	<u>PROFO VINEDOS DE MOLINA</u> 5人の個人生産者からなる会社。モリナバレーに250haのブドウ畑を所有、ワイン用ブドウを生産。生産物は全量コンチャイトロ、サンタカラリーナ、サンタリタ等のチリの大手ワイン瓶詰会社に販売。
<u>LUIS EDUARDO POBLETE THENNET</u> 果実(リンゴ・ブドウ)生産会社。農業機械や大麦の種子保存等のサービスを提供。	<u>ORGANIZACION USUARIOS RIEGO DIGUA(ディグア灌漑使用者組織)</u> ディグア貯水池及びその流域の灌漑システム網の維持、管理、改善を行う組織。合計6万ha、1,800以上の農業生産者による会社。

# 昆明“花博覽会” 3題

今年5月1日より10月31日までの期間、中国の雲南省の省都「昆明」で「昆明世界園芸博覽会」が開かれた。通称「花博」と呼ばれるこの博覽会のメインテーマは「人間と自然(Man and Nature)」、サブテーマは「21世紀に向けて(Marching Towards the 21st Century)」で、開幕以来、中国政府、雲南省政府および関係当局の予想にはほぼ見合う人気を博し、最終的に入場者数900万人、うち外国人80万人(中国報道機関)を記録した。

同博覽会は建国50周年を記念して開催されたものだが、中国初の国際条約に基づくイベント「万国博覽会」の一環であることを、開幕以前からテレビをはじめとする多くのマスメディアなどを通じて宣伝してきたため、特に国内での関心度は高かった。

2000年開催のオリンピックを北京に招致できなかった経緯もあって、国際的に伝統のあるこの博覽会を成功させようとする中国側の意気込みは目を見張るものがあった。

万博は1851年にロンドンで開催されて以来、産業振興および国威発揚の役割を担いながら今日まで150年の歴史を刻んできているが、その間、条約の改正もあって開催方法・手続きだけでなく、テーマの内容も多様化してきている。

近年では94年に大きな条約改正が行われた。パリに本部を置く「博覽会国際事務局(BIE: International Bureau of Exhibition)」がそれまで“一般博”と“特別博”に分類していたものを、「21世紀の万博は地球的規模の課題解決に向けたテーマを設定することが不可欠である」との決議に基づき、2000年のハノーバー万博以後は大規模な“登録博”と小規模な“認定博”に分類、登録博については開催の間隔を5年以上とした。

昆明世界園芸博覽会は、国際的な民間団体「国際園芸生産者協会(AIPH: Association Internationale des Producteurs de l'Horticulture)」の規約に基づき造園・園芸の分野で開催される国際的なイベントであった。一定の規模・期間を超えるものは、AIPH総会で開催の承認を得た後、BIEに対して登録手続きをとり、BIEはこれを博覽会条約の規定により、特別博覽会(新条約では認定博覽会)として追認することになっているので、該当する当博覽会の開催にあたってはこの手順がふまれた。

AIPHは1948年に設立(本部はオランダのハーグ市)され、現在の加盟団体は23ヶ国に及ぶ。日本は日本造園建設業協会が1985年に加盟している。

ここでは“花博覽会”開催中の7月に主催者側の夏雲氏にインタビューし、また、中国人、日本人の見聞記を掲載した。見聞記の方は当然ながら人により見方、受けとめ方に大きな開きがある。

# 夏雲 雲南省北京経済連絡事務処長インタビュー

“園芸博”開催までの道程と花卉生産事情………

(社) 海外農業開発協会 第一事業部

【井佐】

世界園芸博覧会が先にスタートを切っておりますが、この博覧会の目的と開催までの経緯などについて要点を教えてください。

【夏雲】

「'99昆明世界園芸博覧会」と銘うておりますこの博覧会は、中国が博覧会国際事務局(BIE、本部パリ)の承認を得て開催する初めての「国際博覧会」で、国際園芸生産者協会(AIPH、本部ハーグ)の承認も併せて得ています。したがって、会場となる昆明を省都とする雲南省政府の立場は、中央政府からの委託により推進しているという関係にあります。開催にあたっては、国際博覧会協会が定めている条件を満たさなければなりませんが、今回の博覧会は68ヵ国と27の国際機関の参加を得たこともあって優れた内容になったと自負しております。30余りの参加国は恒久的な施設を展示し、中国展覧区でも、台湾、香港、マカオを加えた34の省・区が恒久的な展示園を建設しています。会場の占有面積は218ヘクタールです。

雲南省が博覧会の会場になることの意義は、およそ次の四つに絞られます。第1は世界との交流が進められること。第2は多くの人々に雲南省の実際の有様を知ってもらうこと。地理的に国内の西南の辺境に位置しているため、行き交う多くの人々の認識は、この20年間の発展より伝統的な産物としての“雲南タバコ”を知る程度にとどまっています。第3は専門的な博覧会を通じ、産業発展の支柱の一つに位置づけている生物資源を開発すること。我が省は生物資源の量の豊富さに加え希少品種も多いので、「生物資源の宝庫」と呼ばれたりもします。第4は旅行業を発展させること。省内の自然環境は変化に富んでおります。高原と平地の高低差は大きく、西部高原地域に位置し最も海拔の高い州政府所在地は3,400メートル、博覧会の会場になっている昆明は2,000メートル弱、最も低いところは70メートルといった具合です。また、北回帰線が横断する南部は典型的な熱帯・亜熱帯気候下にあります。

歴史上では、交通面で中原地区との交流が極めて少ない閉塞状況にあったことに原因して独特の歴史文化を作りだしていました。麗江の町並みはその代表例で世界有数の美しさをとどめていると評価されております。また、26にも及ぶ多数の民族が住み、このなかには我が省だけにしか住んでいない15の民族も含まれます。これら少数民族は独自の文化をもち、生活慣習もそれぞれ違いますので、旅行客が彼等に接するのは魅力的でしょう。当初は北京市で開催する計画でしたが、様々な必須要件のうち、特に気候面でこれだけ長期にわたり継続するのは難しいと結論するに至りました。雲南省政府はこれを自省で開催する絶好の機会であると考え、開



北京事務所でインタビューに応じる夏雲氏

催地になる旨の意思表示をしたのです。

1995年末にパリの博覧会国際事務局に正式な開催希望書を提出し、翌96年3月から開催の準備にとりかかりました。この時点から開催までの準備期間は3年しかありません。これまで各國が開催した例では、少なくとも準備期間に5年ほどを要していましたので、博覧会国際事務局が準備期間の短さを危惧したのは当然でしょう。しかし、博覧会開幕前の今年3月に進捗状況の視察を終えたパリの事務局長は、内容に問題はない、満足できる域に達しているとの見解を示しました。

準備段階の当初より我が省の執行部は、①国際水準、②中国の特色、③雲南省の品格の三つを作り出すには、央政府の各部門、地方政府と昆明市民の絶大な協力と努力が必要になります。これらの要因のうち、技術および資金的な面では中央政府から大きな支授を受け、推進面では15の国家部局それぞれとの連絡を密にしながら国内外のパイプ役になってもらいました。もとより、この博覧会の開催にあたっては、政府をはじめ、企業、社団（労組、婦人連合会、学生会などを指す）の貢献度が大きく、これらの協力が得られなかつたならば、今日の状況は生まれなかつたでしょう。

【井佐】

博覧会開幕後の状況をどのように見ておられますか？

【夏雲】

まだ数十日しか経過しておりませんので総括的な話しさはできませんが、展示中の花卉および植物の植え代え、特殊植物の温室内での管理など、参加各国と中国各省が美しい景観を維持するうえで必要な環境作りに努めていることからみて、当初より掲げてきた四つの目標は合格ラインに達していると判断しております。

5月中の1日当たり入場者数は5～7万人でしたが、6月はのべ5万人で推移しました。前月より人数が大幅に減少したのは、ちょうど旅行の少ない季節にぶつかったのが主な原因だと推量しています。

国外来訪者については、日本人が開幕当初より1位の座を占めております。アメリカ、および北欧諸国のいくつかに人身の安全面で不安を指摘するところがありますが、これらは杞憂です。入場者総数は予想をやや下まわっていますが、7、8月には急増するものと推測しています。

\*注：露地の花卉、植物類は40～60日ごとに植え代えている。当地の新聞報道によれば7月下旬以来、

1日の入場者数は7万人を越え、7月24日には8万5,000人を記録。国外からの入場者は全体の3%程度。7月末時点での総入場者数は400万人強。関係部門による10月末の閉幕までの全期間の目標総入場者数は800～1,000万人。

【井佐】

具体的な生物資源の開発、花卉産業の発展は雲南省の重点産業の一つに位置づけられていると言われましたが、そのあたりをもう少し詳しくご紹介ください。

【夏雲】

ここ数年、雲南省は日本、オランダ、イスラエルなど、花卉産業で実績のある国と開発方面的合作の仕事を多く手がけてき、その投資額も大きくなっています。日本とは合資で「慶成花卉公司」、イスラエルとは同じく合資で「陽光花卉公司」、オランダとは合作でチューリップなどの栽培を廻慶高原で行っています。また、多くの会社が省内に花卉の生産地を作っています。

我が省の花卉産業が緒についたのは5年ほど前ですが、現在は北京花卉市場の切り花の50%以上を雲南省産が占めるまでに生産規模を拡大しております。特に冬季の切り花は気候的に恵まれた自然条件が活かされ、国内に出まわっているほとんどが雲南省産になっています。大量の雲南省産の切り花は、毎日、完成間もない昆明と北京を結ぶ道路を通じ北京に運ばれております。

【井佐】

国際市場向けはどの程度の段階にあるのでしょうか？

【夏雲】

発展方向としては国内と国外の両方の市場を考えておりますが、なにぶん花卉分野に力を入れはじめてから日が浅いため、克服しなければならない課題が多いというのが実情です。花卉の種類、品質など、技術面でまだ国際市場が要求する水準には達しておりません。また、開発資金の不足はもとより、多くの花卉生産企業は国際市場をつなぐ情報システムをもっておりません。

先述した慶成花卉公司のような比較的大きな企業でも資金が不十分だといわれています。自然条件から見ての潜在力に比べ、国際市場への進出が遅れているのは、情報システムと生産技術の不足が大きな原因になっていると見ております。

※注：国際貿易センター（International Trade Center）の近年の資料によると、雲南省で切り花の輸出を行っている企業は8社で、これら企業の輸出栽培地は200ヘクタール前後（約13.3ha）。種類はバラ、チューリップ、カーネーション。

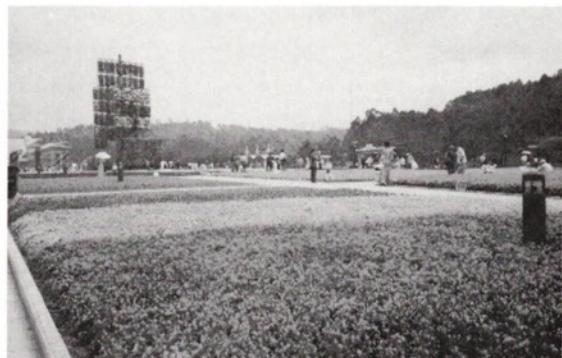
## 中国昆明世界園芸博覧会見聞記

関東造園建設協同組合

理事長 佐藤 友義

1999年4月1日から開かれている昆明市での園芸博覧会も残すところ1ヶ月足らずになつた10月7日から4日間、博覧会会場および周辺農村を視察した。

今回の会場である雲南省昆明市は標高1,890メートル、年間平均気温15°Cの1年中温暖な気候に恵まれた春城の異名をもつ都市である。人口は雲南省450万人、昆明市は105万人と聴いた。南をベトナム、ラオス、ミャンマーの国境と接し西北部は横断山脈がチベットまで続く立地条件のなかに、少数民族であるタイ族、イ族、ハニ族等26もの民族が同居する都市でもある。



花園大通り

## 1. 博覧会会場

我々一行が今回の花博会場を訪問したのは、平成2年に日本の大坂で行われた博覧会の庭園コンテストの外国部門で中国が、日本部門で関東造園建設協同組合がそれぞれグランプリを受賞したのが始まりである。我々はこのときの仲間として大会本部を表敬訪問し、親しく花博の状況を最高責任者の1人である頼称聰教授に説明いただいた。

その要旨は次のようなものであった。

博覧会の会場は面積にして218ヘクタールあるが、ここはかって採石場のある渓谷状の山林で、今日のような会場に仕立て上げるには3年以上の造成期間を必要とするので、当地での実現は困難といわれていた。

また、この博覧会は「人と自然」をメインテーマとし、それを表現するため、花の文化、植物、水、石といった自然を組み合わせることに努めた。

我々は以上の説明を受け、関係資料をもらい会場見学に入った。最初の印象というか驚きは、やたら中国人の多いことであった。中国で開催されているのだから「世界園芸博覧会」とはいえ、そこの国民が多数を占めるのは当然だろうが、外国人の姿はなかなか目にできない。訪れた日が国慶節の最終日にあたる休日だったせいもあるが、各パビリオンは立ち止まるのもままならず、中心通りは新宿の町の混雑する時間帯のようであった。

各展示品のうち、我々の目には国内各省、特別区が展示した庭園出品物が、見応えのある力作として映った。そこには他省より優れたものを出品しようとする創意が感じられ、こうした競争意識が改革開放以後の経済発展の原動力の一つになってきているようにも思えた。

中国ではここ数年、年とともに生花の需要が増えてきてはいるが、一般の国民にとっては、生活水準からみて日々の生活のなかに取り入れ楽しむ余裕をもつまでに至っていない。このことは市中に花屋さんらしきものが殆ど見受けられず、雑貨屋や土産物屋の片隅に造花やドライフラワーがおいてある程度といった状況からも察せられる。現状での切り花や草花園芸品は、弔事の仏花や祝事、ホテルやデパート等での装飾用が主な消費市場になっている。

今回の博覧会のメインパビリオンである  
国際展示館の表現の中にもこれらの実情が  
うかがわれた。生活の中に花を取り入れ、  
盛り花や生け花の装飾を展示するのは日本  
はじめ切り花消費量の多いヨーロッパ諸国  
であったのに対し、地元中国や東南アジア  
諸国は石などの加工工芸品を中心とした展  
示が多かったからである。

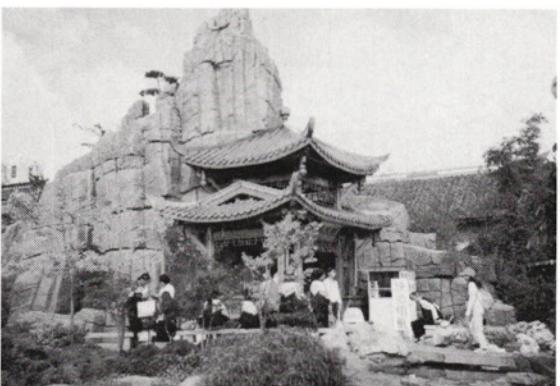
会場は総じて建築物、彫刻、工芸品が多く、植物や花が展示品として占める比率は小さく、添もの程度にしか映らなかったのは残念であった。各パビリオンのなかで植物を主流にして構成していたのはメーンゲートの1万平方メートルを越える大花壇と樹木園、薬草園、盆栽園、大温室などである。しかし、植物を主体に展示している諸国・地域となると、パキスタン、スペイン、オーストリア、台湾など、ごく少数となり、園芸博覧会と銘うって開催して



国際館

いることからすると、やや寂しい感じがないわけではない。

博覧会会場になった雲南省の省都である昆明の年間温度は10~27°Cの間なので、植物が育つには極めては良好な気候といえる。しかし、我々が訪れたときは、時期が外れていたせいか、事前に聞いていたほどに展示されている植物の種類は多くなかった。会場の花壇の8割がたはマリーゴールド、サルビアで占められ、他はペチュニア、キク、コリウス等で、花の咲いている花木類はブーゲンビリア、バラ等ごく限られていた。



重慶館

ちなみに造園家集団として最も心に残る展示作品は、中国国内展示場区では多彩な庭園法を盛り込んだ重慶巴諭園と江蘇吳小筑、国際展示場区ではデザイン性と色彩感覚の妙からパキスタン園、スペイン園であった。

## 2. 農村視察



農村風景

今回の視察旅行では前記の博覧会だけでなく、昆明からベトナムへ続く国道沿いの農村を車で見て歩く機会を得たので、それについても触れておきたい。訪問した地域の多くは平坦地でそこには水田が広がっていたが、丘陵地ではタバコ、トウモロコシが栽培され、果樹園、植木畠等も点在していた。私が以前に観た見渡す限り整然と広がる上海郊外の農村風景とはまるで異なり、改めて気候風土の違いによる作付け作物の多様さに驚かされた。また、集団農業と並行して私有制が認められていることに原因があるのか、果樹園の果樹の根元には野菜や園芸作物が雑然と植えられていた。管理の上からみれば非効率と考えられるが、限られた土地で少しでも多く収穫を上げたいとする農民の気持ちがうかがえる。その果樹園も桃の木の隣に梨の木が植えられ、その隣にはリンゴの木があるといった具合である。このような植え付けをするのは、自然農法の相互防疫効果を狙ってのことかと、同行の通訳氏を介して尋ねてみたが、残念ながら果樹園を開いている者が少数民族であったためか言語が通じず、回答を得るには至らなかっ

た。いざれにしろ彼等自身のアバウトな民族性からくるもので、それ以上の理由はないであろうというものが通訳氏の解釈であった。

しかし、水田の方は整然と管理されているようにみえた。我々が訪ねたおりは、ちょうど2回目の刈り入れが済んだところで、刈り取り後の藁を雑草とともに焼却する作業をしていた。作業体系は、傍らで鍬による耕うん作業をする者もあり、まちまちであった。

各農家は古い形の耕うん機を所有しているようで、そのような耕うん機に荷車をつけて国道の端を悠然と走る姿は珍しくない。また、水牛やロバが牽引する荷車にも随分と出会った。

この国では農業分野に限らず多くの分野での機械化が遅れているが、原因は技術的な裏付けがないというより、人口が多いための政策的なものと解するべきだろう。

国営事業らしき国道の造成ではブルドーザーや大型バックホウも使われていたが、その傍らの農道整備には20人ほどの労働者が手作業で基礎栗石を一個一個並べている。また、国道沿いに農家の人々が3、4人たむろして何時売れるともしれない梨やトウモロコシを売っている。

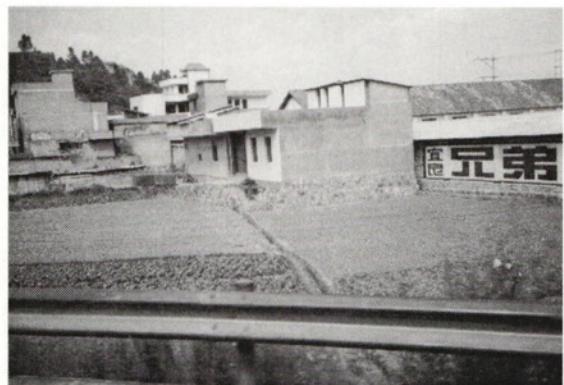
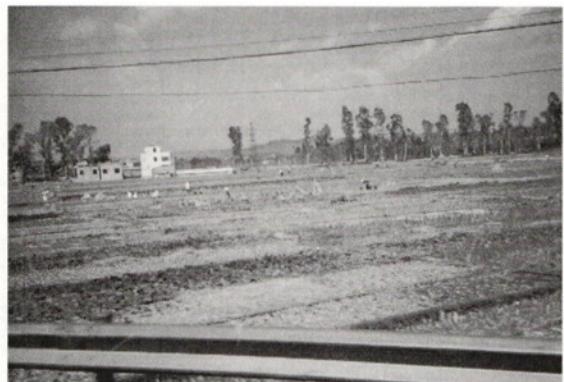
ベトナムに近い山岳地の極めて急激な崖地でトウモロコシを栽培しているのに感心させられかと思えば、比較的平坦な広大な平原地が雑草地になっていたりするので、素人目には不思議になる。

石灰岩が露出した山にはサイプレス（ヒバ状の針葉樹）、ユーカリなどが植林され4～5メートルに育っていた。

農地の肥沃度はレンガ色の赤土で、肥沃とは思えないが雑草の繁りぐあいをみると、極端な痩せ地ではないのであろう。キンレンカやマリーゴールドは、日本では温室やハウスでしか育苗できないのにここでは雑草として山林下や空き地に咲いている。これは気候の温暖さと土壤との間にどのような因果関係があるのか分からぬが、現実に露地で育っているのだから栽培適地なのであろう。

今回は残念ながら花き園芸の本格的な産地を見学する機会はなかったが、聞くところでは温暖な気候を利用した花き栽培は年とともに盛んになり、輸出用が急増している。花き園芸市場では日本や台湾の仲買人が常駐し、切花のラン、バラ、ユリ、カーラー、グラジオラス等がキロ単位で取り引きされ、日本等に空輸しているそうである。

かりに当地域に日本の農業技術面での協力をするとすれば、①土壤の改良技術、②花き生産物のようなきめ細かな栽培分野での技術指導が求められるのではなかろうか。



農村風景

昆明の世界園芸博覧会を観て私自身が痛感したことは、中国が無限の可能性を秘めているという点である。現在は国内整備に追われているが、将来の近い時期に効率化が軌道に乗れば、その資源力、安い労賃などに支えられて海外市場での競争力は特段に高まろう。上海の建築技術は目覚ましい発展を遂げ、日本の高度経済成長期を思い出させる。衣食住の問題を克服できれば、次にくるのは生産の機械化、高度技術化であるが、これらの現象はもうそこまでできているというのが実感である。

## “春城” 無處不飛花

～昆明の世界園芸博覧会を想う～

中国農業大学

社会科学部 講師 王 之盈

### 1. 変貌した内陸都市

7月に雲南省の省都「昆明市」を訪れたが、行くまでが大変。北京からは飛行機はもとより、列車のチケットも、3週間前に予約しなければ買えないといった状況にあったからである。種々の方策を講じ、やっとのこと22日の航空券入手し、空路2時間半をかけ昆明空港に到着した。

当地はよく“春城”と表現される。到着時は午後4時ごろであったが、北京が最高気温30°Cを大きく超えていたのに比べ涼しさを感じさせる。国内の南部に位置するものの、標高が1,880メートルと高く、夏の降雨量も多いので、滞在中の最高気温は北京の最低気温とほぼ変わらない25°C前後であった。

この夏、昆明への旅行客が激増した主な理由は、「'99昆明世界園芸博覧会」の見物にあり、避暑などを目的とした人の移動ではない。この博覧会の開催が多くの国民に知れわたったのは、昨年から報道され続けてきた中国中央テレビをはじめとする全国のマスコミの宣伝に影響されるところが大きい。

私が今回、昆明市を訪れるのは94年の夏休みに3週間ばかりの日程で訪れて以来だから、ほぼ5年ぶりといえる。そのころの昆明が内陸都市の立ち遅れをいたるところで露呈していたのに比べると、今日の発展ぶりは目覚ましい。広々とした平坦な並木道には新型のバスが走り、竣工もないビルがあちらこちらに建ち、道路の中央には緑の絨毯を思わせるクローバーが芝生のように植えられている。聞くところでは、この博覧会の開催にあたり、中央政府は雲南省政府に200億元の援助をし、これをテコに昆明の市政建設が10年繰り上げられたという。かくして、私が描いていた5年前の当地の印象はすっかりと消え、新たな映像に移し替えられたのである。

### 2. 博覧会場に入る

博覧会場は昆明市の南東部郊外、タクシーで20分ほどのところにある。近年、北京では滅多に見られなくなった青空・白雲の下に緑が広がっているところは、昆明に残る唯一の原生林だ

という。ここを背景に博覧会場が作られ、前面に設けられた幅80メートル、高さ20メートルの入り口の上部には「世界園芸博覧園 WORLD HORTI-EXPO-GARDEN」と横書きした文字が掲げられている。入り口に向かって右側は迎賓広場と銘うった広場で、参加各国と国際機関の旗がポール上にはためく。また、入り口前方の花で飾られた円形の台上にカラフルな猿が花束を握った右手を上げている姿が一際目立つが、これは雲南省に生息する希少動物の金絲猴（猿）をデザイン化したもので、当博覧会のシンボルである。

入り口から会場のほぼ中心に設けられた“世紀広場”へ向かう“花園大道”と呼ばれる大通りを進むと、左側に直径19.99メートルの花時計が眼に入ってくる。上海政府が贈呈したもので、1,500鉢の色鮮やかな花で作られている。直径数字は1999年を表しているのだそうだ。

花時計の後ろ側には、縦横60×200メートルの広さにベゴニア、マリーゴールド、サルビアなど多種多様の花が咲いている。サルビアは、北京でよく眼にする赤だけかと思っていたが、紫、クリームなどの色もあるのだと知った。これら花の海に浮かぶ花で形どられた帆船の出来栄えは見事で、あたかも前進しているような動きを感じさせる。

これほど多種かつ大量の花々を生き生きと開花させ続けるのは管理者にとって多大の神経と労作を必要としよう。花の管理をしている園芸従業員にそのあたりの事情を聞いたところ、「博覧会の会期は5月から10月にかけての6ヶ月間と長期にわたるので、種類により1ヶ月から2ヶ月で入れ替えている。20名の園芸従業員は上海から来ている」とのこと。

世紀広場には“大温室”があり、その左側に“中国館”が見える。大温室の方は200メートル以上もの長蛇の列。この日は火曜日で平日なのに、翌日の新聞は入場者数7万人と記述していた。私は会場の東部、一番奥に位置する“国際展覧区”に歩を進めた。

### （1）国際展覧区

当区には世界各国が展覧している。4万8,000平方メートルの敷地のなかに、参加各国の特徴的な建造物・庭園などを見せる区と、国際機関・企業を紹介する“国際館”とがある。これら全部を見ることは時間的に無理だったので、私の見聞したところだけを足速に記す。

#### ①建造物・庭園

スリランカ：当区が他のところに比べ賑わいを見せていたのは、この日がスリランカ日だったかららしい。参加各国は自ら祭典日を決め、平常とは異なるデモンストレーションを行う。割り当てられた敷地の大半は白い大きなビルが占め、建物の前では同国の伝統的と見られる踊りが披露され、建物内ではスリランカ風の食べ物やハンディークラフト等が売っていた。紅茶の売り場が一番の人気を集めていたので、私も記念にひとパック買った。

インドネシア：建物の屋根は草木類で作られており、その下では観客がインドネシアの民族衣装を身に着けて写真を撮っていた。

日本：庭園は美しかったが、私の眼にはやや不精緻に映った。日本で実際の伝統的な庭園を見た経験者にとっては、私同様の感じを抱くのではないか。これとは別に自国の園芸や文化に関する情報を2台のコンピュータで読めるようにしていたのは、国際展覧区の中で日本区が唯一であった。

ベトナム：竹を素材にした廊下が小さな池の回りを走り、ベトナム式の部屋の真ん中に故ホーチミン氏の写真が掲げられていた。ホー氏は青年時代の一時期、雲南省に留学したことがあったという。

タイ：伝統的な農具等が並べられているなかに、中国の伝統的な機織りとよく似た機織りがあった。タイが中国から習ったのか、あるいはその逆なのか、大昔の文化の伝播に思いをはせると不思議な気持ちにさせられる。

2,000平方メートル程度の狭い場所で自国の特徴を表現するのは容易でないだろうが、各国とともにその制約条件の克服に工夫を凝らしていた。

オランダは風車をのどかに回転させ、デンマークはポスターで童話の世界を作り、オーストリア庭園ではバイオリンを演奏していた。エジプトのピラミッドふうの建築も印象に残る。一方、日本の桜、オランダのチューリップ、フィンランドのスズラン、スペインのザクロなど、各国を代表する花についてはあまり関心がもたれていないようだった。

この展覧区の作品のなかで印象に残るものを一つだけ選ぶとすれば、私はイスラエルをあげる。ここはこの国を表現する建築物はおろか指標さえおいていない。旧約聖書に記載されているザクロ、イチジクなど6種類の植物を植えているだけなのだ。このような素晴らしい表現の仕方があることを教わった。

## ②国際館

国際館の敷地は2万平方メートルある。流線形をした館は1万600平方メートルで、周辺には大きな木々が植えられている。館の中は世界各国の造園風景、設備などが写真・実物で紹介されているほか、アジア開発銀行、世界銀行、ユネスコなど、25の国際機関がそれぞれの資料を配布している。

国際貿易センター（International Trade Center）の雲南切り花輸出促進プロジェクトの看板に記載されている説明によれば、8企業がこのプロジェクトのために省内の小哨、呈貢などの地区に7～15ヘクタール程度の生産地を設け、バラ、カーネーションなどを商業栽培している。

これら各組織は専属の人員を配置しておらず、資料の管理、配布などはもっぱら大学生を中心とするボランティアに委ねていた。そのなかの一人、雲南大学人類学部の学生である李さん（20歳）に、このボランティアに一日あたりどのくらいの時間を費やしているかを聞いたところ、「朝早く起き、夜遅くに帰宅。往復にはバスをつかっている」との応えが返ってきた。

### （2）茶園

国際展覧区内の高台を形成する傾斜地には茶が植えられている。小道を登っていくと白い建物の前に中国で有名な宜興紫砂風を思わせる大きな急須が見えてき、その後方に喫茶店が二軒ある。一つは雲南農業大学の茶学部が開いているもの。ここでは同大学の研究者が訪れる客に多種のお茶を紹介するとともに、中国式の茶道の歴史を実物の茶道具、図などを使って説明している。

陸羽の「茶經」のはじめに「南方有佳木」という言葉がある。佳木は茶のことだから、「南には茶の木がある」といった意味になる。中国の茶の歴史は古い。中国で最も古い茶は、1500年

前に逆上るが、その時代の茶が今なお雲南省に生きているという研究報告もある。

ここでのんびりとお茶を飲みながら、視界に入る山の白い断層部分と所々に生える松の緑を眺めていると、疲れ気味の身体が癒される。

### (3) 科学技術館

茶園西側の国際展覧区内にある当館では、植物進化の歴史、雲南省の園芸技術の歴史、近代的な造園・園芸技術などについて紹介している。やや安易な構成といった感じもしたが、中国と諸外国の園芸機械を実物で展覧していたのは迫力があった。

科学技術館の環幕映画（マルチビジョン）は興味をそそられた、これを見る時間はなかったが、看板に書かれた映画の内容は中国の文化、芸術、古跡、園芸などの分野だった。内容もさることながら環幕と言う方式が面白い。

### (4) 中国展覧区

ヤシの葉陰の下は雪のように白い砂。そこに作られた木の小屋でヤシの実を売っている光景は、国内地理を承知している者であれば、すぐに海南省を想起するであろう。当区の総面積は6ヘクタールで、中国の31の省・市・自治区および香港、マカオ、台湾に展示区画を割り振り、それぞれが建物、植物などで独自の特徴を表現している。国際展覧区と同様に私が見聞したところにだけを記述する。

北京区の万春園は、皇室園林で赤い門の上には皇帝の統治が長久であることを意味する黄色の釘が縦横に81個並ぶ。安徽省の徽園の建物は、明と清時代に「徽商（安徽商人）」が活躍した町をイメージしたものらしい。内モンゴル区には遊牧民族のパオがあり、新疆ウイグル区にはイスラムふうの建物がみられた。

浙江省区は「玉宗源泉」と呼ばれる象徴としての稻を石に刻み、石器時代の河姆渡文化の源となった農業を前面に出している。四川省区の竹林の中に作られた「杜甫草堂」は風情がある。詩人杜甫の「茅屋為秋風所破歌」は今でも人気がある。山西省区の槐香園には、国槐、油松、雲杉、白皮松などが植えられている。槐香園の「槐（えんじゅ）」の由来は明時代までさかのぼる。この時代には山西から山東、河南、河北などへの移民者が多く、その手続きをした場所に大きな槐樹があったとの言い伝えがそれだ。今でも移民者たちの子孫のなかには、その木がどこにあったかを知らないても、“故郷は槐樹のあるところ”と言った表現をする。上海の「街心花園」は、中国展覧区のなかで最も近代化的な作りといわれている。

これらの園はそれぞれに異なりをもつが、植物と園芸は昔も今も変わらず人々の生活の一部を構成していると私には感じられた。

### (5) 中国館

中国展覧区の南側に位置する中国館は、当博覧会場のなかでは2万平方メートル弱と最大の面積を占めている。館内は各省・市・自治区および企業区など7部門に分かれているが、私の眼は主に企業区の方に向いた。

企業区には四川・浙江・福建・河北省など数十地域からの企業が参加し、花の種子、土壤、切り花、農産品などを出品している。

「四川高原農業資源開発会社」は日本の愛知県安城市に所在する土壤研究会泥炭研究所との合作で、四川省の高原にある泥炭土壤の開発を行っている。福建省の「商之口会社」は“小花

農”と呼ぶ花の工芸品を展示即売していた。この商品は花の種子と土壌と一緒に特製の缶に入れたもので、同社のパンフレットには今年の3月に福州市場に出したところ、たちまち人気商品になったと書かれている。

河北省に進出したアメリカの独資会社「Fat dragon greenhouse」に勤務する張さんによれば、「開園当初の5月は、自社の展示区を訪れる客はさほど多くなかったが、7月に入るころから増えはじめ、今や毎日5万人から7万人を越える。おかげで商品宣伝をするうえで最適の環境となつた」そうだ。

参加企業は室外に専門的な展覧区を設けているものの、室外での展覧となると4ヵ所程度にとどまっている。私の印象では、参加企業の絶対数の少なさもあるが、展示方法については今一つ工夫がほしい。

#### (6) 人間と自然館

「人と自然館」は中国館の東側、池を挟んだ隣に位置する。敷地は7,000平方メートル。三つの建物のなかは、“人と自然”をテーマに地球のエコロジー問題、自然との依存関係などを写真、ビデオ、文献、实物を使って説明している。森林の乱伐、鯨の乱獲などの写真やビデオを見せられると、地球のエコロジー維持がいかに深刻な状況にあるかを改めて認識させられる。

中国の各地で生産された室内観賞用の植物を見ていると、マルクス哲学の重要なConceptである人間の手による自然の美しさを感じる。大昔から継承されてきた薬用植物を使った漢方薬についての絵と文献からは、いかに人間と自然が深い関わりをもっているかを教えられる。

#### (7) 大温室

博覧会場に入った当初に大行列をしていた世紀広場にある大温室を丘陵側から眺めると、天井部はすくすく伸び育った三つの葉を連想させる。ステンレスの骨組みに支えられた透明なガラスと温室内の緑とが醸しだす外観は宝石のように美しい。温室内は、熱帯、温帯、高山植物に分かれている。熱帯植物園の広さは757平方メートルで、雲南省の熱帯雨林植物が多い。中は緑の木々がうっそうと茂り、温度、湿度ともに高い。植物のなかで最も背丈の高い杉の仲間は30メートル以上といわれ、屋根を突き破らんばかりである。観客に人気のあった植物の一つに「踊り草」と呼ばれる草があった。人が隣で歌を唄うとそのリズムに合わせて踊るというのだ。

温帯植物園の広さは450平方メートル、「百草庁」という名がついている。地表から様々な花で塔や球形などを作り、上からは蘭の花などを縄でぶら下げている。

高山植物園は風が強かったせいもあってか寒く感じた。築山、小川、土丘が分散して造られ、ゲンチャナ、プリムラなどの植物がみられた。

#### (8) 竹園

会場の入り口から世紀広場を結ぶ花園大通りの右側には湖が広がっている。これを渡り紫色の石が敷かれた小道を進むと両側は竹林である。中国、日本など内外各地から250種類以上の竹が集められているそうで、竹で亭や雲南省の少数民族であるタイ族風の家屋が建てられている。私は竹の種類についてはよく知っているつもりでいたが、その認識はとんでもない誤りであった。

種類により大きさも形ちもずいぶん違う。巨龍竹や大葉慈などになると、見た目は竹というより高木に近い。逆に花毛竹などは草みたいに小さく纖細だ。王羲之の有名な草書「十七帖」の中に出てくる「筇竹杖」から名をとったと思われる筇竹（マダケの一種）の節は大きく美しいので、昔から杖の材料に使われている。また、この竹は節間の表面が人の顔を連想させるお面のようなふくらみがあることから、人面竹（表2「人面竹」の写真を参照）とも呼ばれる。斑竹については、昔の皇后が流した涙といった伝説にまつわる「斑竹一枝千滴涙」の成語は知っていたが、主幹に涙のような模様のある実際のものを見るのははじめてであった。よく雲南省が世界の竹類研究センターに例えられるのは、それだけ種類が多いからであろう。

#### (9) 蔬菜園

当園は竹園の東側に隣接している。中国北部地方の農家の建て方を思わせる建造物を中心に、野菜、キノコなどが栽培され、屋内ではスイカ、冬ウリが展示されていた。いずれも黒龍江産で、重さは前者が69キロ、後者が96キロもあった。

#### (10) 盆栽園

蔬菜園の東側に造られた盆栽園の面積は、博覧会場の中では僅か3,500平方メートルと一番小さい。中国各地の代表的な盆栽が展示され、盆栽の歴史を図と文献で紹介している。当園は、小さなものを好む日本からの見学者にとっては興味のある展示区といえるのではないか。

#### (11) 薬草園

私は見聞の最後に、盆栽園の東隣にある薬草園に足を運んだ。ここには、500種類に及ぶ漢方薬に使う植物が集められている。バラ、アザミ、オオバコなど、日常の生活の中でもよく見かける植物も多くあり、これらを見ていると、“すべての植物が薬になるのだなあ”といった気持ちになってくる。

### 3. 回想

昆明の華やいだ博覧会から北京へもどり、瞬く間に3ヵ月が経過した。彼の地で私の眼を楽しませ、心に潤いを与えてくれた花々はすでに自然の攝理にしたがい土に還ったであろう。

次の漢詩は、拙いながら私が詠んだこれら花々への回想である。

忽忽帝城秋欲暮 好風好雨留不住 世博串紅色幾許 幾化成泥幾化土

博覧会がテーマとした自然と人間との調和を大切にする考えを堅持していくならば、昆明に咲くその時々の花は土に還っても、新たな花を咲かせ、代々咲く行為をやめないであろう。

最後にこの博覧会を見聞しての私なりの総合的な印象を述べる。

美しさの面は申し分なかったが、科学技術の導入という点では今一つもの足りなさを感じた。また、政府の力の入れ具合に比べると、展覧企業の参加数は少なすぎるのではないか。中国の造園・園芸の先行きを展望するとき、潜在力を生起させる鍵を握るのは企業にほかならないと考えるからだ。

# D 投資案件 DATA FILE

(コスタリカ ②加工食品)

コスタリカは歴史的に見ると、コーヒー、バナナ、砂糖、ジャム、ゼリー等のいわゆる伝統的農産物の輸出国であったが、ここ10年間程で多様化が進み、パームハート、トゲバンレイシ・パッションフルーツ・スターフルーツ等の濃縮果汁、マカダミア、ハラペニョ、トロピカルソース等が輸出されるようになってきている。

外的要因としては、主な取引先であるアメリカ、ヨーロッパ諸国から受ける輸出產品への非課税、もしくは特恵関税などの恩典があげられる。内的要因としては、保存、濃縮、冷凍、缶詰、包装等、先進技術の結集による産業育成があげられる。現在、多種多様な農産物を原料とする良質の製品生産が可能となったことで、新しい市場への参入が促進されている。

(社)海外農業開発協会 第一事業部

コスタリカ貿易振興会ホームページ  
<http://www.procomer.com/>

フリーゾーンと基礎インフラ	コスタリカの概況
<p>ニカラグア カリブ海 太平洋 パナマ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>フリーゾーン</li> <li>空港</li> <li>ハイウェイ</li> <li>港湾</li> </ul>	<p>国土面積：5万1,100km<sup>2</sup> 人口(97年)：339万人 人口増加率(90-96年)：2.4% 首都：サン・ホセ、10°N、 標高1,200m 人種：スペイン系白人95%、 黒人3%、原住民他2% 言語：スペイン語 識字率：94% 平均余命：76.3年 GNP(98年)： 104億8,2000万ドル 一人当たりGNP(98年)： 2,965ドル 経済成長率：-0.6%(96年)、 3.2%(97年)、6.2%(98年) 物価上昇率：17.6%(96年)、 11.2%(97年)、12.4%(98年)</p>

出所：中銀、PROCOMER

### 商品輸出の推移 (FOB)

	1995年	1996年(1)	1997年(2)
総輸出額(100万ドル)	2,844	3,034	3,322
伸び率(%)	21.7	6.7	9.5
伝統産品輸出(100万ドル)	1,191	1,103	1,180
伸び率(%)	25.5	△7.5	7.0
コーヒー 量(1,000キントル)	417	385	450
単価(キントル当りドル)	2,793	3,440	2,849
バナナ 量(100万箱、1箱18.14Kg)	149.40	112.00	158.02
単価(箱当りドル)	684	631	639
牛肉 量(1,000キロ)	112	116	107
単価(キロ当りドル)	6.10	5.44	6.00
砂糖 量(1,000袋、1袋=46キロ)	44	42	44
単価(1袋当りドル)	21,158	20,700	21,000
砂糖 量(1,000袋、1袋=46キロ)	2.09	2.02	2.10
単価(1袋当りドル)	46	44	46
非伝統産品輸出(100万ドル)	3,171	2,816	3,300
伸び率(%)	14.55	15.80	14.00
対中米輸出(100万ドル)	1,652	1,931	2,142
伸び率(%)	19.1	16.9	10.9
その他地域への輸出(100万ドル)	350	388	407
伸び率(%)	21.4	10.9	5.0
伸び率(%)	1,034	1,274	1,429
伸び率(%)	16.4	23.2	12.2

(1)暫定値、(2)SEFSAによる (出所) 中央銀行('95,'96) SEFSA('97)

PROCOMER (コスタリカ貿易振興会) によれば、欧米のみならずアジア諸国、中米共同市場、メキシコ、南アメリカも重要な輸出市場と位置付けている。

ネスレ、デルモンテ、ナビスコ、ハイネケン等、多くの国際企業がコスタリカで事業展開している実情は、政治的安定、社会的平穏、地理的立地、インフラ整備、質の高い労働力、生活水準等の優位性のある中米・カリブ海地域における投資先国として高い評価を得ているからと考えられる。

以下に最近年の食品産業分野の主な取り扱い品目を列挙し(順不同)、主な食品製造会社のリストを示す。

パスタ、バナナピューレ、牛肉、牛肉製品、キャンディー、マカダミア缶詰、キャッサバ缶詰、キャッサバチップ、プランティンチップ、チーズ、チュウインガム、ココナッツオイル、コーヒー豆、着色料、香辛料、乾燥果実、酪製品、味付きローストマカダミア、冷凍パイナップル、冷凍果実、冷凍果汁、冷凍野菜、果実ジュース、濃縮果実ジュース、果実ペースト、果実ピューレ、グラインドコーヒー、パークハート、天然ハチミツ、辛味ソース、アイスクリーム、工業用マーガリン、ジャム、フルーツゼリー、マーマレード、マカダミアナッツ、オートミル、ヌガー、オートフレーク、オレンジジュース、有機サトウキビ、パークオイル、スライスピーパイヤ、パイナップルジュース、ハラペニョ、加工果実、ローストコーヒー、根菜・茎菜類、スキムミルク、果実香ソフトドリンク、大豆レクチン、大豆油、植物油脂

## 主な食品製造会社

社名	ACEITES Y DERIVADOS CENTROAMERICANOS S.A.		
住所	6651-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 290-2333	電話	(506) 290-1456
社名	ALIMENTOS KAMUK INTERNACIONAL S.A.		
住所	7691-1000 San Jose	E-Mail	elpelon@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 223-4276	電話	(506) 233-6711
社名	ALIMENTOS NATURALES ALIN.S.A		
住所	7581-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 231-6551	電話	(506) 220-1490
社名	AROMAS Y SABORES TECNICOS,S.A. (ASTEK S.A.)		
住所	6141-1000 San Jose	E-Mail	asteckcr@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 254-4764	電話	(506) 254-6479
社名	AS-SUKKAR S.A.		
住所	3439-1000 San Jose	E-Mail	assukar@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 224-8960	電話	(506) 225-2945
社名	CAFE FINO S.A.		
住所	1579-3000	E-Mail	fcastells@miroma.com
Fax	(506) 261-6677	電話	(506) 261-0606
社名	CAMARA COSTARRICENSE DE LA INDUSTRIA ALIMENTARIA		
住所	7097-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 234-6783	電話	(506) 225-1887
社名	CAMINOS DEL SOL		
住所	36-2015 Registro Nacional	E-Mail	-
Fax	(506) 552-0638	電話	(506) 552-6529
社名	CHICLERA COSTARRICENSE S.A.		
住所	2888-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 253-8979	電話	(506) 253-6161
社名	CONSERVAS DEL VALLE S.A.		
住所	1259-Cartago	E-Mail	-
Fax	(506) 227-0168	電話	(506) 552-6154
社名	COOPAGRIMAR R.L.		
住所	40-Zarcero,Alfaro Ru.z, Alajuela	E-Mail	kludeke@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 463-3937	電話	(506) 463-3505
社名	COOPEAGROPAL R.L.		
住所	129-8255	E-Mail	-
Fax	(506) 783-5505	電話	(506) 775-0992
社名	COOPERATIVA DE PRODUCTORES DE LECHE R.L.		
住所	605-1000 San Jose	E-Mail	cplext@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 223-7277	電話	(506) 257-3481
社名	DEL ORO S.A.		
住所	7110-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 296-4708	電話	(506) 296-5183
社名	DERIVADOS DE MAIZ ALIMENTICIO S.A.		
住所	7299-1000 San Jose	E-Mail	philbal@tn.ticonet.co.cr
Fax	(506) 290-1655	電話	(506) 232-9110
社名	EL GALLITO INDUSTRIAL S.A.		
住所	623-1000 San Jose	E-Mail	-
Fax	(506) 293-2993	電話	(506) 293-2822
社名	EMPAQUES ASEPTICOS CENTROAMERICANOS S.A.		
住所	66-2110	E-Mail	-
Fax	(506) 229-4124	電話	(506) 229-2828
社名	EXPORPACK S.A.		
住所	3997-1000 San Jose	E-Mail	exporpac@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 233-2394	電話	(506) 222-6722
社名	FIDEOS PRECOCIDOS DE COSTA RICA,S.A.		
住所	700-1100	E-Mail	viguicr@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 244-0380	電話	(506) 244-2847/244-2653

社名	FLORIDA PRODUCTS S.A.		
住所	3580—1000 San Jose	E-Mail	—
Fax	(506) 239—0081	電話	(506) 293—2432
社名	FRUTAS Y SABORES H.C.S.A.		
住所	460—1649	E-Mail	—
Fax	(506) 460—1649	電話	(506) 194—4400
社名	GRUPO CAFEBRITT S.A.		
住所	528—3000	E-Mail	info@cafebritt.com
Fax	(506) 260—1456	電話	(506) 261—0707
社名	HACIENDA JUAN VINAS,S.A.		
住所	3741—1000 San Jose	E-Mail	hjvinas@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 222—4973	電話	(506) 257—8325/257—8327
社名	INCOMER Internacional de Comercio S.A.		
住所	8012—1000 San Jose	E-Mail	hyshijos@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 253—6725	電話	(506) 224—0014
社名	INTERTEC,S.A.		
住所	8—5760—1000	E-Mail	intertec@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 222—7055	電話	(506) 221—7831
社名	MACADAMIA DE COSTA RICA S.A.		
住所	308—7150	E-Mail	macadamia@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 531—1316	電話	(506) 531—1133
社名	MACADAMIA MIRAVALLES,S.A.	home-page	<a href="http://www.macadamia.co.cr">http://www.macadamia.co.cr</a>
住所	1524—1250	E-Mail	macadamia@cool.co.cr
Fax	(506) 265—6381	電話	(506) 265—6660/265—6244
社名	MEJORES ALIMENTOS DE COSTA RICA S.A.		
住所	289—1250	E-Mail	jadonato@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 221—4038	電話	(506) 221—5329
社名	NATURALMENTE COSTA RICA S.A.		
住所	289—1250 San Jose	E-Mail	jadonato@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 220—4752/221—4038	電話	(506) 296—0354/220—0036
社名	PALMITOS DE COSTA RICA,S.A.		
住所	167—1000 San Jose	E-Mail	iperez@ns.goldnet.co.cr
Fax	(506) 573—7990	電話	(506) 573—8985/573—8984
社名	PFIZER S.A./PFIZER ZONA FRANCA,S.A.		
住所	10202—1000 San Jose	E-Mail	—
Fax	(506) 293—2346	電話	(506) 293—2345
社名	PRODUCTOS COLUMBIA S.A.		
住所	284—1200	E-Mail	columbia@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 232—3940	電話	(506) 231—2021
社名	PRODUCTOS NEGRINI LTDA.		
住所	2037—1000 San Jose	E-Mail	—
Fax	(506) 260—3232	電話	(506) 260—3060
社名	PRODUCTOS ROCHE S.A. (SUPLIDOR DE INGREDIENTES,INGREDIENT SUPPLIER)		
住所	3438—1000 San Jose	E-Mail	jaime.piza@roche.com
Fax	(506) 224—4249	電話	(506) 220—4243
社名	PRODUCTOS UNICOS DE COSTA RICA		
住所	18—4030 Alajuela	E-Mail	montecamejo@juno.com
Fax	(506) 443—3541	電話	(506) 443—3541
社名	REPRESENTANTES TECNICOS COSTARRICENSES,S.A.		
住所	154—3006	E-Mail	rorlich@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 293—4660	電話	(506) 293—5089
社名	ROMA PRINCE S.A.		
住所	734—4050	E-Mail	—
Fax	(506) 443—4400	電話	(506) 443—4444
社名	TURRONES DE COSTA RICA S.A.		
住所	665—2010	E-Mail	harnecke@sol.racsa.co.cr
Fax	(506) 259—7850	電話	(506) 250—2060

# 海外農林業開発協力促進事業

## 民間ベースの農林業投資を支援

(社)海外農業開発協会は昭和50年4月、我が国の開発途上国などにおける農業の開発協力に寄与することを目的として、農林水産省・外務省の認可により設立されました。

以来、当協会は、民間企業、政府および政府機関に協力し、情報の収集・分析、調査・研究、事業計画の策定、研修員の受け入れなどの事業を積極的に進めております。

また、国際協力事業団をはじめとする政府機関の行う民間支援事業(調査、融資、専門家派遣、研修員受け入れ)の農業部門については、会員を中心とする民間企業と政府機関とのパイプ役としての役割を果たしております。

## 海外農林業開発協力促進事業とは

多くの開発途上国では、農林業が重要な経済基盤の一つになっており、その分野の発展に協力する我が国の役割は大きいといえます。そのさい、当協会では経済的自立に必要な民間部門の発展を促すうえで、政府間ベースの開発援助に加え、我が国民間ベースによる農業開発協力の推進も欠かせないとの見地から、昭和62年度より農林水産省の補助事業として「海外農林業開発協力促進事業」を実施しております。

### 1. 優良案件発掘・形成事業（個別案件の形成）

農業開発ニーズなどが認められる開発途上国に事業計画、経営計画、栽培などの各分野の専門家で構成される調査団を派遣して技術的・経済的視点から開発事業の実施可能性を検討し、民間企業などによる農林業開発協力事業の発掘・形成を促進します。

### 2. 地域別民間農林業協力重点分野検討基礎調査（農業投資促進セミナーの開催）

農業投資の可能性が高いと見込まれる地域に調査団を派遣して、当該地域の農業事情、投資環境、社会経済情勢を把握・検討し、検討結果に基づく農業開発協力の重点分野をセミナーなどを通じて民間企業に提示します。

### 3. 海外農林業投資円滑化調査（情報の提供と民間企業参加による現地調査）

投資関連情報の整備・提供を行うとともに、主に海外事業活動経験の少ない企業などを対象に、関心の高い途上国へ調査団を派遣し、当該国の農業開発ニーズ、農業生産環境などを把握します。

相談窓口：(社)海外農業開発協会  
第一事業部  
TEL：03-3478-3509

農林水産省  
国際協力計画課事業団班  
TEL：03-3502-8111(内線2849)

# 海外農業投資の



通巻第13号 1999年12月20日

発行／社団法人 海外農業開発協会 (OADA)

Overseas Agricultural Development Association

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-10-32 アジア会館 3 F

○編集 第一事業部 TEL 03-3478-3509

FAX 03-3401-6048

E-mail oada@a1.mbn.or.jp



85° E

45° N

## 中国新疆ウイグル自治区の 「コルラ(庫爾勒)梨」

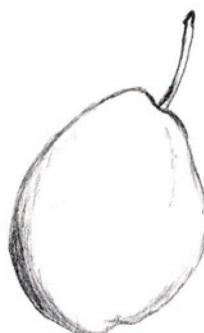
学名: *Pyrus sp.*  
[バラ科: ROSACEAE]  
中国名: 庫爾勒香梨

タクラマカン砂漠のオアシス、コルラ市（巴音郭楞蒙古  
自治州の州都）で特産の香梨を食べた。100 g 程の小さな洋梨の  
形をした果実で、レモン色の果皮は薄く剥かなくてよい。石細胞は少なく、  
甘みは強い。

中国の文献では中国梨と西洋梨の系統間の交雑種で新疆梨系とされる。コ  
ルラ周辺では昔から栽培されているが、他のオアシスでは上手く栽培でき  
ないという。

果実の保存性は高く、輸送性に優れるが、生産量は少ない。北京では多  
種ある梨の中でも高値がついている。サッチャー元首相が気に入って箱ご  
と持ち帰ったと聞いた。

（第一事業部 渡辺 哲）



**OADA**

---

---

*Overseas  
Agricultural  
Development  
Association*